『三島由紀夫　魅せられる精神』

柴田勝二著

おうふう　二〇〇一年十一月二〇日

切腹による自決。三島由紀夫の死があまりにも大きな衝撃だっただけに、三島文学を論じる際に、常に拭い去りがたい多くの色が付きまとう。また、その自死の形だけでなく、彼自身が同性愛者である像を自らつくったという、当時の世風にはいささか畸形に映る事柄が、三島文学研究にその自伝的色彩を帯びることを余儀なくする。三島のその虚実相反する像が、三島文学に描かれる死と生のあいだに立ち上る亡霊のごとく、神化されつつも、ついぞ羽化登仙する日がやってこない。欲界に身を置き、人間臭にまみれる天人の姿を筆花に乗せ、世に送りだすことが、三島が追求してやまないことだが、それが却って三島文学を研究する者にとって逃れがたい呪縛となることはなんとも皮肉なことであろう。

しかし、『三島由紀夫　魅せられる精神』の著者は、こうした人間臭にまみれる三島像を忠実に見据え、神話化されがちなこの作家をまず「生活者」の位置にもどす作業から三島文学の解読を始めている。その作業によって、三島文学に潜む「文化」「歴史」「国家」「社会」「政治」「美学」「形式」「哲学」「思想」などの解読コードをあぶりだし、「生活史と作品の系譜のなかで、せめぎあいつつ姿をあらわしつづける魅惑の様相」を追うことで、〈魅せられる者〉としての三島像を提示している。

四部構成の本書は、タイトルともなっている〈魅せられる精神〉が首尾一貫した中心テーマであり、数珠繋がりの形で各章ごとに三島文学を解くキーワードがひとつひとつ入念に検証を重ねられ、やがて三島文学の全体像が浮かび上がってくるという仕組みとなっている。個々の章は独立した作品論としてももちろんだが、三島という作家、そして三島文学の全貌を把握することもできる。国内外の三島研究に言及しつつも慎重に細部に拘って反論を試み、織り込まれた氏の独自の見地に開眼させられることもしばしばである。

第一部、「「投身」の運動」においては、『花ざかりの森』、『盗賊』『仮面の告白』など、三島の初期作から文壇出世作までを扱い、三島文学における〈憧憬〉〈憑依〉の構造を解き明かす。特に、デビュー作の『花ざかりの森』の主人公である熙明夫人を、「「あくがれ」の主体よりも強く、対象によって憑依される身体としての側面を持つ人物とし、このような側面が初めて明確な形を取ってあらわれるのがこの作品であり、また、それ以降の三島の作品において繰り返し姿をあらわす要素であると指摘する。『花ざかりの森』における「憧れ」に重ねられる「脱魂的な運動性」なる性質をいったん、三島文学の原動力として措定し、仮説を置くことで、それ以降の作品においても綿密な論を敷衍している。

第二部、「超越と魅惑」においては、『愛の渇き』『青の時代』『禁色』『潮騒』『金閣寺』を扱い、第一部の考察をさらに深めるかたちで、本書のメインテーマである〈魅せられる精神〉の核心に迫る。なか

でも、八代神社と伊勢神宮との近縁性を手がかりに、初江と倭姫命を重ね合わせ、主人公の二人の情念を受動的な力によって支配されるものとし、「新治と初江との親和は女性的なものの慰撫を受けつつ、「荒魂」が太陽神によって包摂される」図式を導き出すことによって、これまでとは異なる『潮騒』の側面を提示したことが大きな前進である。また、『金閣寺』を論じた「反転する話者――『金閣寺』の憑依」では、手記の綴り手は本当に吃音の青年僧〈溝口〉なのか、という従来の読みに対して疑問を呈するところから、柏木と溝口の関係を再測定することによって、金閣炎上に新たな解釈を施したところは、まことに鮮やかである。

第三部、「〈天皇〉の表象」においては、『鏡子の家』『サド侯爵夫人』『わが友ヒットラー』を扱い、三島文学に見られる〈ニヒリズム〉〈父親〉、そして〈二・二六事件〉との関連性を追究する。『鏡子の家』とその前後に書かれた作品群を一連に論じることで、三島文学における〈ニヒリズム〉の相貌をより明白なものにし、そこから浮かび上がった三島の現実へのペシミスティックな志向を、晩年の作品群を解明する鍵とした。

第四部、「輪廻する霊魂」においては、『豊饒の海』(『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』)を扱い、三島文学における〈唯識論〉の影響関係を明らかにすることで、〈魅せられる者〉としての三島像を確立していく。これまで第一部から論証されてきた諸々の視点がすべて第四部において集約され、三島最晩年の作である『豊饒の海』を解析する四つの論考は、まさに本書を締め括る白眉である。ここでは、仏教の唯識論に神道の思想を内在させた三島の考える輪廻転生のあり方が、綿密な論証に裏打ちされ、また、それが確実に『豊饒の海』の作品構造を左右し、四部作全篇に脈打つ鼓動のように、作品の到るところに感じることができる。こうした意識の存在を、感覚ではなく、論証尽くで納得させてくれる。

「序」においても述べられているように、〈魅せられる者〉としての三島像を確立させることが本書の眼目であり、三島文学に見られる反転性を、「意識的営為の主体であろうとする志向と、何ものかの牽引に身を委ねてしまう受動性とのせめぎあいの結果」と結論付け、「それを軸とする〈魅せられる精神〉の諸相を追究することで、三島由紀夫の作品世界を構築し直すこと」も、重要な課題となっている。論述の行間に縦横無礙に引き合いに出された古今東西の文学テキストや思想、哲学、民俗学、仏典などは瞠目するほどの数にのぼる。初出原稿を綿密に検証し、三島を囲む社会背景、政治、経済の側面も含め、影響を与えた些細な要因も見逃すまいという緻密な考察が織り成す本書は、氏の年来の三島研究における集大成であることは言うまでもない。

(蕭幸君)